

金沢箔の伝統を未来につなぐ 日本の金箔生産を支える老舗メーカー 株式会社 今井金箔

地域開発調査部 研究員 前田 由美子

概要

所在地 石川県金沢市幸町7-3
代表者 代表取締役 今井 康弘
創業 1898（明治31）年
設立 1976（昭和51）年
従業員数 22人（2026年9月現在）
事業内容 金属箔・粉の製造販売、箔関連製品の製造・販売、
箔関連製品の直営店運営
U R L <https://imai.kinpaku.co.jp>



金沢は、国内で生産される金箔の唯一の産地である。株式会社今井金箔は、1898（明治31）年に創業し、130年近くこの地で箔の製造・販売に携わってきた老舗メーカーだ。金箔をはじめとする金属箔の製造・販売のほか、日常に箔を取り入れたオリジナル商品の企画・販売や、建築物への箔押し加工技術の提供まで、箔に関わる事業を幅広く展開している。業界を牽引する同社だが、現在、会社設立以来の最大の転機を迎えているという。目まぐるしい時代の変化に対応しながら奮闘する代表取締役の今井康弘氏と、康弘氏の次女で営業担当の今井由佳氏に話を伺った。

銀箔製造が主流の金沢で創業

そもそもなぜ金沢で製箔業が盛んになったのか。1593（文禄2）年、豊臣秀吉の朝鮮出兵の折、加賀百万石の祖・前田利家公が明の使節団出迎えのため、肥前名護屋から「七尾で金箔、金沢で銀箔を製造せよ」と命じた書状が今に伝わる。その後、江戸に箔座が設置され、全国のお金・銀箔の製造・販売は幕府の統制を受けたが、工芸品の振興に力を入れる加賀藩では製箔の技術がひそかに受け継がれていった。明治に入り東京の金座・銀座が廃止されると、金沢箔の生産は一気に拡大していく。

現代表である康弘氏の曾祖父、^{こさぶろう}小三郎氏が創業した当時は、金箔ではなく銀箔の製造・販売が主流で、康弘氏の幼少期でも、着物の帯などに使用される銀箔の出荷量が金箔を大きく上回っていたという。創業者の小三郎氏は職人として自ら打った箔を全国に売り歩いていたが、2代目への継承を機に、同社は箔の間屋業（卸売）へと事業を転換していった。

金箔需要を伸ばした金仏壇の普及

同社で金箔の取扱いが増えた理由は、一般家庭への仏壇の普及があったのではないかと康弘氏は言う。北陸は古くから浄土真宗の信仰が厚い地域だ。真宗の仏壇は、内側に金箔を施して極楽浄土を表現した「金仏壇」が主流である。戦後を経て高度経済成長期に入り、人々の生活が豊かになると、高価な金仏壇も一般家庭の身近な存在になっていく。康弘氏が伝え聞くところによると、1959（昭和34）年の伊勢湾台風で流されたり破損したりした仏壇を購入・修復するために、同じく真宗門徒の多い名古屋の仏壇店では長い行列ができていたという。金仏壇の修復（お洗濯）では金箔をすべて貼り直すため、費用が200～300万円（当時）に上ることもまれではなかった。人々にとって、仏壇はそれほどまでに生活と心の支えであったのだ。

同社の金箔の販売量が大きく伸びていた1976年、3代目に当たる康弘氏の父が「株式会社今井金箔」を設立した。金箔の販売量はその後1990年代初頭のバブル期にかけて順調に伸びていったが、住宅事情やライフスタイルの変化に伴う金仏壇の需要減も重なり、1990年代後半から急落し、現在に至るまで減少を続けている。ピーク時には300ほどあった製箔業者も、実質的に稼働しているのは今や20～30社程度にまで落ち込んでいるという。

事業の根幹を支える寺院の修復

同社の売上の約6割を占めているのが、神社仏閣への金箔の販売だ。全国の寺社の修復に使用する金箔はすべて、生産量100%を誇る金沢に発注される。京都の金閣寺や岩手の中尊寺金色堂を輝かせているのも金沢の金箔である。

金は1グラム2万3000円～2万5000円（2026年7～8月）で推移しており、加工費を含めると金箔1000枚で100万円相当に上る。寺社修復には何十万枚という金箔が必要となるため、金箔代だけで億単位の費用がかかることもある。50年に1度といった長い周期にはなるが、それだけ大量の需要が発生するため、定期的に行われる寺社修復向けの金箔販売が、同社の事業の根幹をなしている。

製箔の2つの技法「縁付」と「断切」

箔を作るには2つの製法がある。有名寺社のような文化財の金箔に用いられるのは、主に「縁付」という、400年以上職人たちに継承されてきた伝統的な技法である。時間も手間もかかるが、美しさ・希少性に優れた金箔に仕上げることができる。この「縁付金箔製造」は2014年に国の選定保存技術となり、2020年には「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」の1つとしてユネスコ無形文化遺産に登録された。一方「断切」は、金箔需要が急激に伸びた1960年代に、縁付だけでは生産が追いつかなくなったことから開発された量産型の製法で、現在約9割の金箔がこの技法で作られている。

紙作りが命の「縁付」と安定生産の「断切」

箔作りの職人の姿を想像するとき、金箔を叩いている姿がすぐに目に浮かぶのではないだろうか。しかし、意外なことに、箔を打っている時間というの

は全体工程のごくわずかで、1週間程度なのだそう。縁付職人の仕事の大半を占めるのは「箔打紙」を作ることだ。箔打紙とは、延ばした合金（上澄）を挟んで叩き、箔を延ばしていくための紙である。この紙の出来によって、箔の品質は変わってくる。

「縁付」では、兵庫で製作される名塩紙などの手すきの和紙を下地として使い、これに柿渋、卵、灰汁などを含んだ液体をしみこませ、叩いて締めるという作業を繰り返して「箔打紙」を作る。仕上がるまでに半年ほどかかるが、その後、延びが良くて艶のある良い箔が打てるかどうかは、実際に叩いてみるまでわからない。紙作りは職人の技量に左右されるため、一種のギャンブルに近いと康弘氏は言う。

対する「断切」では、密度が高く品質の安定したグラシン紙（食品包装などに用いられる半透明の薄い紙）にカーボンとのりを溶いたものを塗って「箔打紙」にする。この製法の場合、1週間もあれば「箔打紙」を準備できるため、紙作りにかかる期間が大幅に短縮される。安価でたくさんの金箔を生産できるため、現在では主流の製法になっているが、箔に映る上品な和紙の風合いを好み、あえて縁付金箔のみを注文する客が絶えることはないという。



縁付で最も重要な箔打紙の仕込み



断切では、約1000枚の金箔を重ねたところで、四辺を紙ごと断って規定の大きさにする

伝統技術の継承のために

金箔の製造工程は大きく澄屋すみやの仕事と箔屋はくやの仕事に分かれる。まず「澄屋」が、金に微量の銀と銅を混ぜて合金を作り、約1000分の1ミリまで打ち延ばして、20センチ角の大きさに裁断する。これを「上澄うわすみ」という。ここから1万分の1ミリにまで薄く仕上げるのが「箔屋」であり、前述の「縁付」や「断切」もこの箔屋の工程にあたる。

しかし、近年の金箔需要の低下に伴い、こうした伝統技術を受け継ぐ職人の数も減少の一途をたどっている。どのように後継者を育成していくかは業界全体の課題だ。そのようななか、今井金箔では、地域の職人への外注を維持しつつも、自社で職人を育成し、「澄屋」から「箔屋」に至る金箔製造の全工程を自社で完結できる体制を整えている。組織として技術やノウハウを継承し、次世代の職人を育むための取り組みである。

業界唯一の一貫生産体制

同社が箔の一貫生産体制の取り組みを開始したのは約35年前、康弘氏が入社したころのことだ。それまではすべての生産を外注に頼っていたが、より品質の高い金箔を安定的に作っていくためには、内製化が必要だと強く感じていたという。決して大所帯ではないが、現在は自社ですべての工程を行えるため、特注品にも対応することができる。社内の職人の平均年齢も、40代と比較的若い。

自社で製造できるからこそ、素材の研究にも熱心だ。同社は、銀箔、プラチナ箔などの金箔以外の生産にも取り組みながら、製箔技術のさらなる向上を追求している。さらに、一貫生産体制を構築している同社だからこそ果たせる社会的役割がある。箔に関わる歴史的な研究への協力はその1つだ。

研究素材の試作から現代アートひろとらくしやうの素材まで

博物館や美術館などから学術研究のための素材製作を依頼されることも少なくない。例えば、同社では、江戸時代のある絵師が好んで使用していたと考えられている箔素材を、材料となる金属の含有量を調整して再現するというような協力を行っている。

同様に、同社はアーティストの高度な要望にも応じている。金箔を用いたアート作品ひろとらくしやうの創作で海外からも高い評価を得ている箔工芸作家・裕人礫翔氏に

は全幅の信頼を寄せられており、同社が製作したオーダーメイドの箔材料は氏の作品に活かされている。

学術研究から現代アートまで、特注品に幅広く対応できるのは、まさに自社で箔の一貫生産体制を構築しているからにほかならない。

箔打紙の新たな固定方法を開発

さらに、同社では製箔技術の開発も行っている。業界では、縁付や断切の際に箔打紙を固定するベルトとして、伝統的に「ネコ革」が用いられてきた。ネコ革は三味線に使用されており、三味線の革が破れるなどして使えなくなったものを譲り受け、これまで箔打ち作業に用いてきた。しかし、近年では三味線自体の需要も減少しているため、ネコ革が入手しづらくなっている。同社は石川県工業試験場とともに、代替となる素材の開発に乗り出した。従来のネコ革は、箔打ちの途中で切れてしまい、作業を中断しなければならないことが多かった。そこで、途中で絶対に切れないベルトを作ろうと新素材の開発に取り組み始めたという。2年間かけて検討し採用したのは、NASA（アメリカ航空宇宙局）でも宇宙服などに使用されている、軽くて丈夫な「アラミド繊維」という合成繊維だ。

最先端繊維で効率化を実現

2025年からこのアラミド繊維を使用した箔打紙の固定方法を採用したことで、生産性は大きくアップした。長くて1週間ほどで交換しなければならなかったネコ革に対し、アラミド繊維は3カ月に1回程度の交換で済む。作業環境が安定し、途中でベルトが切れることがなくなったため、作業時間は大幅に減少した。当初は、昔ながらの技法に誇りを持つ職人から反発があったが、使い続けていくうちに、「新しい方法がずっと楽でいい」と現場の意識も変わっていった。

今では、同社の中で働く職人と外注先の職人はアラミド素材を使用した方法で箔打ちを行っている。



アラミド繊維を使用したベルトで固定し箔打ちの準備をする様子

「生き残っていくために、できることはなるべく合理化していきたい」という康弘氏の言葉には、伝統工芸の世界で革新的な挑戦をし続ける、強い決意が感じられる。

生き残りをかけた商品開発

減り続ける箔の需要を自分たちで創出する——その大きな使命を担うのが、康弘氏の娘で営業担当の由佳氏だ。「時代に合わせて需要を掘り起こしながら、箔や粉の製造技術という核をしっかりと守っていききたい」と由佳氏は語る。入社以来、金箔やプラチナ箔を用いたジェルネイル、飲み物やお菓子を簡単に装飾できる食用金箔のシートなど、特に若者に訴求する新商品の開発に力を注いできた。

最近では、イラストレーター・ヒダカナオト氏とのコラボレーションにより、氏の人気キャラクター「ぼんやり子だぬき」に金箔やプラチナ箔を使用した置物を製作した。このキャラクターの大ファンだった由佳氏の妹がきっかけで、ヒダカ氏に直接相談し、この商品が誕生したという。これらの商品は、金沢幸町の本店ショップと金沢21世紀美術館にほど近い広坂店で販売されている。



笠の部分に金箔やプラチナ箔があしらわれた
新商品「ぼんやり子だぬき」の置物

人気の金箔貼り体験

金箔需要の減少により業界全体が苦境に立たされているなか、近年追い風となっているのが観光需要の高まりだ。2015年の北陸新幹線金沢開業後、飛躍的に増えた観光客に向けて、「金沢箔の良さを知ってもらいたい。その美しさを感じてもらいたい」との思いで提供しているのが金箔貼り体験である。もともとは、由佳氏の祖母（康弘氏の母）が、訪れた人に金沢箔についてもっと知ってもらいたいと、

金箔貼り体験を本店で始めた。体験のほかに金箔ソフトも開発し、金箔の魅力を体感してもらうための取り組みを積極的に行っていた。

こうした祖母の思いを受け継いで、由佳氏が生み出した最新の金箔貼り体験の商品に「百万石の花小判」がある。石川県産の食材を使用し、地元の和菓子店や企業、協同組合と共同で開発した小判型の華やかな饅頭だ。この商品には縁付金箔を使用しており、店舗で饅頭に金箔を貼る体験として展開している。



新商品「百万石の花小判」



バッグへの金箔貼り体験は
人気メニューの1つ

そのほか特に人気が高いのは、タンブラーやバッグ、ポーチなど、普段使いができるアイテムへの金箔貼り体験で、毎月500組近くの予約が入るという。これらのメニューはコロナ禍をきっかけに刷新されたものだ。「密」になることを避けるため、所要時間を30分程度に短縮したことが、手軽さを求める観光客の満足度を高めたようだ。

金箔の認知拡大を目指して始めた体験事業だが、今や経営の柱の1つへと成長した。寺院や仏壇の修復といった伝統的な需要にとらわれない新しい取り組みが、現在では売上全体の3割を占めるまでになっている。

生産者としての誇りと責任を胸に

金箔メーカー、金箔の卸業、箔製品の企画・開発、小売業と、さまざまな顔を持つ今井金箔。しかし、同社が最も重く感じているのは「生産者としての誇りと責任」だ。伝統的な需要に依存しては淘汰を免れない一方で、金箔は文化財の修復には欠かせない唯一無二の素材でもある。この尊い技術と伝統を絶やさず、未来へ紡ぎたい。そのために、今井金箔はあえて伝統の世界に革新をもたらし、新たな挑戦を続けている。優雅できらびやかな金沢箔の魅力の裏側には、熱い情熱と創意工夫で業界をひたむきに支える企業の姿があった。